

氏名	立川 泰史		
学位の種類	博士（造形）		
学位記番号	第 D0003 号		
学位授与日	2019年3月20日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目	和文	造形発想におけるイメージの比喩的生成過程	
	英文	The Process of Metaphorical Generation of Images in Formative Conceptions	
審査委員	主査	教授（研究補助教員）	小林 貴史
	副査	教授（研究指導教員）	春日 明夫
	副査	教授（研究補助教員）	石賀 直之
	副査	教授	池上 英洋
	副査	教授	井原 浩子

博士論文要旨

本研究は、造形教育における子どものイメージ生成過程を「社会的な感性の増幅」という視点から明らかにし、今日的な実践課題に相応した新しい教育に寄与することを目的とする。造形発想の思考プロセスは、基本的に主観的で不可視な精神活動である。それゆえ、発想過程の議論は想像力を発揮する姿像と呼び換えて語られることも多い。しかし今日、社会的な感性をもつ美的な生活者という子ども像の期待は、美に意味や価値をつくりだす資質や能力を育むという漸進的な使命に結びつくことも確かである。こうした問題意識に沿い、発想過程の理論的・実践的な枠組みを提起し、新たな造形教育の指導改善に寄与するところに本論は位置づく。比喩という認識の特性と造形する身体や思考の関係を探る本論は、「視覚的な語りの調査（Visual Narrative Inquiry）」という質的研究方法を用いて、上述した目的と内容にアプローチする考察である。

第1章では、上述した研究の背景と目的を明らかにした。造形教育の学習主体によるイメージ生成過程を、身体経験を再構成する能動的な創造的想像力と捉え、「ことば・からだ・認識」の三項関係を探るという問いを立てた。ここでいう再構成とは、子どもたちが大人の発想を超えて物語性の高い表現を豊かに具現化することである。この物語性の豊かさには、日常のさまざまな経験が住まい、一見無縁なもの同士を躊躇なく結びつけるイメージの飛躍が見える。それらはあくまで日常生活にあるトピックから選ばれていることも明らかである。こうしたイメージの発想には、生活と学習を取り巻く多様な言語体験と身体的な感覚経験のダイナミズムが働いているのではないか、という仮説が研究の背景である。

第2章では、問題意識を、イメージ生成を①主観的な精神活動として捉える問題、②発達段階の諸相で捉える問題、③個性開放を趣旨とした教育史の問題の3観点で整理し、問題側面を具体的に検討する。①「イメージ生成を主観的精神活動として捉える問題」については、「空想的想像の世界」は生活世界との対照性をもって、互いに密接な親密関係にあるものとして現出してくるので、特に自然状態にちかく生活している子どもは外的世界と現前する対象をその都度問い直すことはしない。よって、「ごっこ」遊びに見られるように、子どもの想像性とは虚実を超え、無縁なものを結びつけることが特徴であり、機能する実態は文脈の内に生きていくことが示唆された。②「イメージ生成を発達から捉える問題」については、代表的な児童画研究が、子どもの視覚経験や美学的な発達特性の議論に移行し、後に認知発達論の知見を開くことになった経緯を明らかにした。芸術も科学も受動的な知覚よりも能動的な参加を求めるというN.グッドマンの指摘、またS.フロイト、J.ピアジェ、L.ヴィゴツキーらの発達観を検証したJ.ブルーナーが指摘した〈言語世界と想像力を結ぶ具体像〉の問い直しは、特に重要である。③「イメージ生成を個性の開放とした教育史の問題」では、「バウハウス (Bauhaus)」の構成教育に基づき、武井勝雄 (1955) らが「造形教育センター」で求めた教育にも、赤津隆介という実践家を通してH.リードの思想の影響があったことを確認した。そのリードも「イメージの記号的・象徴的な働き」に言及しており、造形的思考への具体的内容が看過されている経緯を明らかにした。

第3章では、現代に特有な社会・教育的環境に相応した課題として創造性と心像形成に着目し、S.アリエティ (1976) やR.ニスベット (1987) らの議論を中心に、知覚・認識にかかわる創造性、社会美学という新しい観点からみるメタファー思考などを概観する。それにより、造形教育に求められる創造性や感性の再定義を試みる。まず、「人間の創造性」とはアリエティによれば「既存のものから使えるものを利用して、これを予測できない方法で変化させる」ことになり、その「創造的過程」には二種の必要条件がある。その一つは「創造的人間の外部のものをすべて含むカテゴリーで《偶然事》(contingencies) と呼べる。もう一つは《想像力》(imagination) と《形のない認識》(amorphous cognition) である。一方で「想像力」は知覚と深い関係にあり、特定の図 (figure) が背景 (地) から識別されると、複雑な現実を安定した像にして私たちに感知させようと「単純化現象」を導く。以上から、創造的想像力は、知覚経験と結びつく知的な営みであり、イメージはアスペクト知覚等をも包含するカテゴリーに位置づくものとして定義できた。またこうしたイメージ形成は、創造発生的文化と相互作用する社会的参加のもとに築かれる。それはニスベットが『歴史とメタファー』でいうように、メタファー (比喩) 的な思考と認識の汎用性を創造的思考にまで拡大する捉え方である。第3節「社会美学と感性」では、石川三四郎やG.ジンメルらが主張する社会的感性の視点から創造性を定位した。文化の肌触りを感性的探究により味わうこと、こうした社会的相互作用のもとで多意・多声に満ちたポリフォニックな事象の中でこそ、多義的なイメージを発想することができると示唆される。

第4章では、イメージ生成過程と比喩の概念について整理し、その歴史的議論の動向から子どもの発達と比喩的認識の関係づけを試みる。J.ロック(1690)の経験主義認識論を継承するD.ヒューム(1940)は、観念を「思考と推論における印象の弱い、おぼろげな心像：フェイント・イメージ(faint images)」と定義し、「心像(イメージ)」とは、「印象が再現(representation)されたもの」、あるいは印象の「模写(copy)」であるとした。対して、ガードナー(1987)、G.レイコフ(1980)、M.ジョンソン(1980)及びA.エフランド(2002)は、心的イメージの成り立ちには想像的思考を支える図式である「イメージ・スキーマ(Image-schemata)」という身体的基盤をもつ「抽象的構造体」が、私たちの概念、経験、言語的意味に中心的な役割を担っていると指摘する。こうした議論は、比喩にレトリックを超えた意味論への系譜を開くものと捉えた。日常的で一目「字義どおり」と思われる表現も単なる言語表現として比喩的なのではなく、「概念メタファー」と呼ぶ基盤機能が働いていることは、R.ギブス Jr.(2008)にも引き継がれ、われわれの行為や経験の「意味」は「経験のゲシュタルト」の水準で創発し、ある物事を別のものを通じてメタファー的に理解することが可能になるという知見を得た。また、「子どもの発達と比喩の機能」では、B.レオンダー(1975)、H.ウェルナー&B.カプラン(1963)らの議論から、「隠喩の経験が諸々の概念的位階の生成を増進させる。抽象的思考への実質的な導入を準備しうる」こと、隠喩的思考は決定的に文脈に依存し、幼児にとっては言葉に先立って存在し始めると示唆される。

第5章では、イメージ生成における比喩写像について〈言語的な学習文脈や環境〉の側面からアプローチする調査研究を行う。特に、アリストテレス以来レトリックとして捉えられてきた比喩が、もはや「ことばの彩」でなく、私たちの世界の捉え方に根付く「認識と創造の手段」であることについて、学的体系の整理と実践調査に基づいて検討する。また、3本の実践フィールド調査と保育者を対象にした質問紙調査から、造形活動における「ことば環境」(導入、見取り等)の検討を実施した。

結果、実践観察調査からは、「感性的材料」と「概念の発生を助ける言語」は生活する子どもの思考の中にあり、自然な筋道で造形する子どものイメージ生成に寄与していること、子どもの比喩的思考には、順序性があり、メトニミー(換喩)的な視点で目標領域の参照点を得ながらメタファー(隠喩)的思考につながることで、メトニミー的思考の段階では起点領域の対象をすげ替えるなどの「可逆性」が見られることなどが明らかになった。保育者への質問紙調査では、経験年数が多く、造形活動と言語的アプローチの連関を意識する指導のもとで子どもの比喩的思考も育まれるという実態も確認できた。

第6章では、イメージ生成における比喩的写像について〈からだと感覚経験〉の側面からアプローチする調査研究を行う。身体と不可分な感覚経験と認識をつなぐ先行議論を基礎に、身体感覚を生かす造形実践の分析を通して、有意な環境構成を視野に入れて検討した。

また、ここでも保育者や教師を対象に質問紙調査を行い、身体感覚を生かす造形活動環境の実態を調査した。ここでは基本事項として M.ジョンソン(1987)の議論を中心に抽出した。これにより、「身体化された図式によるものの理解のパターンを他の事象に隠喩的に投射すること」は、私たちが身体で経験することからの合理的で創造的な理解に深くかかわっていることが証拠立てられている。「身体化された理解」には、「イメージ図式」と「隠喩的投射」の相互作用がある。イメージ図式とは、「われわれの知覚的相互作用と運動プログラムに、繰り返し現れる動的パターン」であり、これによってわれわれが経験に首尾一貫した構造が与えられる。「隠喩的投射」とは「種類の異なる他の領域を構造づけるために、ある経験領域からそこへパターンを投射するやり方」である。また、市川浩(2001)の身体と認識についての示唆的議論を検討した。市川がいう「身分け」という独自の身体性は、何かを「身」で知ることを通して、自分の「身」自身を把握する「知」の方法である。こうした身体性が比喩的思考の基盤をなす。一方、2本に実践観察では、尼ヶ崎彬(1990)がいうように、「常識上は無縁のもの」を縁づけて家族とし、芋づる式カテゴリーを思わぬパターンにする「なぞらえ」という思考があること、また比喩する対象に「らしさ」を感じてイメージを発想する思考プロセスを明らかにした。身体感覚は、比喩的思考によって抽象度が高まるにつれ思考ワードから消え、言語に置き換えられていく傾向もわかった。

第7章では、イメージの比喩的生成過程を可視化する図式モデルを策定するため、日常の経験理解を新しい概念体系に結ぶイメージ・スキーマの機能を検討する。また、「視覚的隠喩」としての特性を示す筋道、および乳幼児から発達する類似性知覚やカテゴリー認識の問題を検討し、〈ヴィジュアル・ルメタファーを〉果たすイメージの生成モデルを作成する。ここでの成果は、言語レベルの比喩的写像と造形言語(形・色)への表現に向かう視覚的隠喩との大きな違いを策定できたことである。私たちの概念体系は喩えるものから喩えられるものへ(喩辞から主意へ)写像される。しかし、視覚的隠喩では抽象化された図柄イメージを概念として複数イメージの変換操作を繰り返す過程が存在することがわかった。これは、「造形発想特有な視覚的比喩の過程にある独自のプロセス」として捉えられる。V.C.オールドリッチ(1968)が指摘したピカソ、マティス、ダ・ヴィンチらの芸術家も比喩の図式に基づくイメージ変換を行った事実、他方でパウル・クレーがバウハウス時代に考案したフォルム生成の概念変換は、視覚的隠喩を特徴づける十分な根拠になると判断した。これらの成果を基に、「～として見る」というイメージの比喩的生成過程のモデルを策定した。

第8章では、前章までの具体的な検討の成果を確認し、作成した比喩的生成モデルを効果的に展開する造形活動をあげ、図式モデルの実践可能性を確認していく。また、実践範囲での具体的な課題を抽出し、今後の研究に結ぶ。举例実践では、考案モデルの要である「イメージ変換を繰り返す道筋」を観点に、概念イメージが身体的思考とともに編み直される場面を確認した。また不可視な思考活動で大きな課題となる「見取りと評価」に言及し、子ども

自身が時間軸にそって思考トピックをドキュメントする可視化方法を提案する。

視覚メタファーの原理だけでなく、社会的創造性や美的感性の再定義から出発した本研究は、比喩という創造思考のダイナミズムの発見につながった。抽象レベルのイメージ合成など、イメージと比喩概念を往復する二方位性は、造形発想に独自の筋道と捉えられる。

審査要旨

イメージの生成についてはこれまでも多くの説が示されているが、本研究においては造形発想におけるイメージの比喩的生成過程としてとらえ論考を深めている点に博士論文として新たな研究の視座を開く独自性を認めることができる。

本研究では、イメージの発想には生活と学習を取り巻く多様な言語体験と身体的な感覚経験のダイナミズムが働いているとする仮説のもとに研究が展開されている。そこでは様々な学問大系にわたる多くの先行研究を丹念に分析することから、本論考をより説得力を持ったものへとつなげている。また、具体的な調査データを一定の基準で分析し、それらをフィードバックする形で最終的なイメージの比喩的生成モデルの構築を試みており、この独創的なモデルは今後さらにデータを分析することで改良されていくと思われる。これらのことから全体のデータと理論のバランスが取れており、論文としてその構成と内容を高く評価することができる。

さらに、本研究では造形教育における子供のイメージ生成過程を「社会的な感性の増幅」という視点から明らかにし、今日的な実践課題に相応した新しい教育に寄与することをその目的に据えていることから、今後本研究の成果が社会的に大きな価値を持って還元されることが望まれる。特に心的イメージの比喩的な生成過程を造形発想に重ねてみる仮説については、学問的な価値を有するというだけでなく、造形教育の現場の指導において、導入、発想、構想の指導段階に援用される内容であると考えられる。

以上のように、本研究は論文の構成、内容の質と量において申し分のないものであり、博士論文としてその成果を大いに評価したい。さらに今後の課題として、教育現場における実践での分析と検証のすりあわせを基に、新たな知見を見出していくことを期待している。